



有田の伝統を支えてきた 天草陶石の昨今

〔天草陶石の現状〕

10年後の平成28年は有田焼創業400年を迎える有田です。その伝統を支えてきたひとつが、磁器の原料である陶石です。

過日、その産地である熊本県天草町高浜(現在の天草市)を訪れました。現在、天草地方では7社ほどの陶石採掘業者があり、その中でも長年にわたり有田へ供給している上田陶石合資会社を訪ね、岩下邦明総務部長に話を伺いました。

岩下さんによると、上田陶石の生産量は昭和40年代をピークに減少し、特に昭和48年の37,429トンとピークに、平成15年は5,338トンに需要が減少し、全盛期の14パーセントになっているということでした。

供給先は塩田町(現在の嬉野市)の製土業者が主で、石塊の形で出荷し、その日も朝一番のフェリーを使ってトラックが来たということでしたが、20年ほど前までは高浜の港から船で塩田まで運んでいました。

陶石の採掘工程は基本的には今も昔も変わらないということでしたが、重機を使い、坑道掘りから露天掘りへと変わっていました。しかし、陶石の良し悪しの仕分けは今でも人の目で作業をするということで、採掘現場近くに選鉱場が設けられていました。

〔江戸時代の原料事情〕

享保十六年(1731)に書かれた『皿山雀』にあるように、有田皿山では長い間、泉山陶石が「当所餘多の人々露命をつなぐ山」でした。陶工李參平(金ヶ江三兵衛)によって17世紀初頭に発見された泉山は、佐賀藩の厳しい管理下に置かれ採掘を続けてきました。

しかし『皿山代官旧記覚書』宝暦三年(1753)の日記には武雄領の筒江窯では天草土払底に付き、武雄領との境目に新しい土穴の普請をしたことが記され、有田に隣接する筒江窯では江戸時代から天草陶石を使用していたようです。また、天草・上田家には砥石・陶石に関する文書があり、その中の『近国焼物大概帳(寛政八年・1796)』は、当時の焼物生産地の状況と天草の陶石を使用しているか否かを調査したのですが、そこには有田皿山代官の管轄下にある窯場も記されています。

それによれば有田の内山・外山や広瀬、大川内・市瀬の各窯場は「地土ヲ以南京焼之上品焼物色々出来」とあって、すべて泉山の陶石を使用していました。

しかし、私領の各窯場の武雄領弓野皿山、筒江や蓮池領志田、鹿島領浜、蓮池領吉田では天草土を使用し「南京焼」つまり磁器の中品、下品を生産していたとあります。このように18世紀後半になると、有田皿山以外では天草陶石の使用が容認されていたものと思われる。

〔明治以降の泉山と天草〕

しかしながら、明治になっても有田は泉山の土にこだわっています。これを裏付ける資料『明治19年陶磁器沿革其他取調書』には、陶器原料の土産地は「肥前国西松浦郡有田皿山字泉山 字象ノ鼻 字保谷 字鷹取 字大谷 字舞々谷 字白川谷 以上の陶石を以て製造す。原料にて他国より取寄するものなし」とあります。

その後は明治34年に開催された第6回西松浦郡陶磁器品評会(現在の九州山口陶磁展)では、ある窯元が天草陶石を使用した作品を出品して違約金を課せられました。しかし翌35年の品評会では一転して各種の原料使用が認められ、さらに明治45年の品評会では「日進月歩の世にあつては旧慣を墨守するのも良策ならず」と次第に天草陶石が優勢となっています。

以上が有田に於ける泉山陶石から天草陶石使用への変遷ですが、例外的には幕末の海外輸出品を取り扱った久富家、田代家などの薄手の製品には、三川内で天草陶石を使用した製品を焼成したこともあります。しかしながら長年にわたり泉山陶石にこだわったのは『肥前陶磁史考』にあるように「泉山石を尊重する特種の名譽を、永遠に保持せんとせしものに過ぎなかつた」ためだったようです。

現在の有田焼は、鉄分が少ないことや可塑性に優れているということで、素地の原料のほとんどを天草陶石に頼っています。しかし、天草陶石の出荷量が漸減している昨今、これからどのような変化が有田にもたらされるのでしょうか。

季刊

皿

山

2006
夏

No.70

大阪毎日新聞に見る 昭和初期の有田窯業界 ～陶工に物を聴く夕～①

このほど寄贈された資料の中に、昭和10年8月6日付から10日付までの大阪毎日新聞の記事がありました。題して「陶工に物を聴く夕」。当時の有田焼の動向や、第一線で活躍中の職人が集ってそれぞれ忌憚のない意見を交わしています。

この座談会は商工省陶磁器試験所の磯松嶺造氏や金原京一氏等の来有を契機に、大阪毎日新聞の有田販売店が有田焼振興の一助と夏の読み物にと企画したものでした。今では歴史と捉えられる事かもしれませんが、参加者の思いはそのまま、現在も当てはまる事柄ではないかと思えます。原文は文語体の所もあり読みづらい部分もありますがそのころの息遣いを感じていただきたく、原文のまま3回にわたり紹介します。

出席者

寺内信一(元有田工業学校長) 川浪竹山(前香蘭社美術品画工部主任) 松本佩山(帝展入選作家) 川浪養治(県立有田工業学校教諭) 松本繁一(県窯業試験場長事務取扱) 久間松次(龍山製陶所主) 古賀平八郎(元有田工業学校教諭) 柿沢一郎(香蘭社美術品部主任) 江原熊男(同前) 満松惣市(深川製磁会社美術品部) 寺内李荘(肥前作陶会同人) 二宮都水(帯止作家) 加藤祥雲(帯止作家) 稲富巨溪(同) 今泉清(今泉陶園) 金原京一(京都陶磁器試験場嘱託) 磯松嶺造(国立陶磁器試験場技師) 川内繁次(有田公民学校教師) 百田信一(同) 松本末弘(同) 古川邦司(有田公民学校長) 吉岡喜助(有田小学校長)
(新聞社側)
武藤佐賀支局長 神近通信員 堀田販売店主

◆ 誉れの有田焼作家動員 “ねらい所” 陶器博物館が欲しい

寺内氏

ただ今御指名によって座長ということになりましたので年長者という意味で、お引受けすることに致します。

このたび大阪毎日新聞が結構な座談会を開いて、どちらかといえば世の中にあまり出ないしかし実際の仕事の上で一番骨を折っていただいている方々に集まって頂いて、その御経験なり希望なりを聴く機会を得させて貰ったことはまことに我々業界に携わるものとして喜ばしいことでありましてこれを機会に作家が世に出るようになりましょう、世の中が陶工を尊重する

様にもなることと深く感ずる次第であります。

さていよいよ皆さんのお話を承ることにいたしますが“有田焼の将来のねらいどころ”といった風のことについて業者の直接の指導の立場にあられる松本さん一つ、どうぞ……。

松本(繁)氏

平凡な何らまとまらない考え方もありますが、わが国の窯業の品種というものは多種多様でありましてその用途の上から申上げてみても沢山ありますが、そのうち有田を中心とする肥前物はその一部しかないのでありまして、有田焼をどう作るか、どうねらって作るかということはその製作上なり技術なりがある以上殊に特徴を殺してまで造るということは出来ない結果自ら品種の分野というものは定るものと思えます。自ら有田焼自身の範囲があるところ漠然と考えて居ります。

寺内氏

お互い得手という意味で満松さん一つ、錦の方でお話くださいませ。

満松氏

私は有田焼の伝統的な古伊万里風のをねらってやっておりますが将来の有田焼は染錦を生かした奥行きや落ち着きのある有田固有の絵具でやることだという信念でやっています。最近京都辺りの試験場で試みられた色鍋島風のものを見ましても随分有田絵具を造るのに苦心せられているようで例えば「赤」のような西洋絵具を研究してやっていたら、しっくり、うまくいっていないように考えています。七、八年前の好況時代に色鍋島、柿右衛門風のを盛んに模造して売出しましたが骨董物としてよく買われたものだったが今ではそんな物を造れといってもそう簡単には出来まいと思う、それで昔の名工や先輩が苦心した絵具と、ウスッペラな西洋絵具は比較にならないと思われる、製造家も絵具屋さんももっと研究してそゝることだと思われま。

寺内氏

一般的な見方からいけば金原さんなどの御批評はまことに聴きする点があると思えます、どうぞ。

金原氏

そうですね、現在有田焼は今最高級とされているが物によってはそうでないものもある、安い方にしても或はその中間か、八合位の普通品としているのもあって有田焼の進むのは上にも下にもおよぶべきだと考える、

目下のところ有田焼は値段を目的とする一番安いものと一般家庭用の値ごろのものと値段はかまわぬという三段目標に進むことだと考えます。

寺内氏

今作家として一番御希望さるる点はどんなことでしょうか二宮さん一つ忌憚ないところを。

二宮氏

一番私の困りますのはよい参考品のないことです、いま私達の作っております品物から考えまして。

寺内氏

そうですね、博物館とでもいうものがありまして誰でも自由に参観出切るところがあればよいがなあ。

川浪氏

いま、泉山の^{注①}磁石場事務所が建築中ですがあそこの一隅に参考品などを置くような計画を立てていられるようですか…。

稲富氏

泉山もよいですが、もっと中央がいいですねあ。

松本(佩)氏

^{注②}試験場の陳列室などに有田の秘蔵物を保管して誰でも見せるようにすることなどもよい方法だと考える。

金原氏

相当所有者は私も知合がありますので確実な保管方法さえ出来れば、それに対する出品は私が喜んで皆さんのためしてあげていいと思う。

二宮氏

キモノや洋服に用いる装身具を作っている私達は流行の激しいだけにその作品も変化が多いだけ良い参考品は実際必要だ。

◆和田画伯の図案 いま一押し押せ

満松氏

いろいろと考え方はあろうけれど有田焼の一番現在行き詰まっているのは意匠図案だと思う、とって新しいこと、変わったものといっても大抵な型にはまって仕舞う、県当局でも十年ばかり前は経費を使うて改良もしたが、^{注③}实用化せずにすんだ、また最近和田さん

に依頼して二百種ほどの図案も出来たが、それがどれほどモノになったか、宣伝会などで試作品として試みはされたが、それをいま一歩進める、いま一押し押してみるという熱が足りないように考えられる。

寺内氏

少し工夫して新しい物を作り出すとなんとか、かんとかといって叩きこわす傾向がある、それといってそのままヌーボー式にやっておれば何をしているかと批評される、それではならぬと進めばまた異説が飛び出す、しかしそれでいいと思う、その自然の成り行きの中に変化がかくされて行って双方が全体的な調和を生んで進んでゆくのではないかと考えられる、それは一気に自分の思うようにやるということにならなくてはだめだ、そうするには勢力のある何ンにも不自由のないそれこそ権力と技術を持った人でも出ない限り、右とか左とかその技巧を思うままに向けることは出来ないものだと考える。

◆模倣品は駄目

松本(繁)氏

先般私が県の宣伝会に参りまして大阪の大丸の仕入れ部の課長に会い有田焼に対する批評を尋ねましたところ、よく有田では京都風の図案を真似て作っているようだが、全国各地の焼き物を扱っているデパートとしては有田物がことさらに京都ものを真似たのは扱う気にならない、あくまで有田の特色を盛った品を歓迎するといっていました但实际上だと私は考えます。

(次号につづく)

《注》

- ①磁石場事務所 昭和10年9月11日、泉山石場神社下に新築落成式を挙行。
- ②試験場 (現佐賀県窯業技術センター) 昭和5年6月13日、中樽に窯業に関する技術開発や試験、技能者育成を目的とした佐賀県第一窯業試験場が落成。その後、昭和43年に町内の中部田ノ平、平成6年に有田町赤坂へと2度の移転をし、現在に至る。
- ③和田(三造)画伯 昭和6年8月10日、半井佐賀県知事は陶磁器意匠図案指導の目的で、洋画家の和田三造氏を有田町に招いた。翌7年10月8日の第三回見本市で、その250種の図案が披露された。

古を訪ねて

皿山ウォーキング・パート9開催

恒例となった皿山ウォーキング(教育委員会生涯学習課主催)ですが、今回は合併後初の開催となり旧西有田地区を中心に歩くことにしました。

5月24日(水)、旧有田町からバスで旧西有田町の唐船城まで移動しました。参加者32名は唐船城を出発し、江戸時代に伊万里まで焼物が運ばれた道をさかのぼりながら代官所が置かれた大木宿を通り、広瀬地区の窯跡までの約4キロのコースを歩きました。

西有田地区には国見連峰山ろくに旧石器時代からの遺跡が点在しますが、今回は中世から近世にかけての歴史をたどりながらのウォーキングでした。

参加者の野田光子さん(外尾山)は「いつも通りなれた道なのに、こんな所に代官所があったんですね」と驚いた様子でした。また、東京から越してきて2ヶ月めの山本文子さんは「広瀬向窯の規模が大きく、窯道具や陶片が散らばっている」様子に感慨深げでした。

当日は五月の好天に恵まれ汗ばむほどでしたが、吹き抜ける風はさわやかでした。秋にも10回目の皿山ウォーキングを予定していますので、皆様の参加をお待ちしています。



有田中学校1年生

古伊万里ロードを歩く

5月17日、有田中学校1年生による第3回古伊万里ロードを歩く授業があいにくの雨の中行われました。その事前学習として、当館から出向いて有田焼を運んだ荷にゃーさん、有田焼を荷造りした荷師さんのことなどを話しました。

まず、昨年亡くなった荷師・橋本勝さんのワラを使

ったの荷造りの様子を、生前撮影したビデオで紹介。大きな皿や壺から小さな猪口や碗まで、どんな焼物でもその形に合わせて荷造りが出来上がる様子に、焼物作りとはまた違った有田の職人の技に子供たちも驚いた様子でした。

当日は荷を担いで伊万里川沿いの伊万里市陶器商家資料館まで、約16キロを歩きました。子どもたちはどのような思いを抱いて歩いたのでしょうか、興味のあるところです。

有田人の書籍

『幻の明治伊万里

～悲劇の精磁会社』

蒲地孝典著 日本経済新聞社発行

(定価 3200円+税)



このほど、長年古美術商として数々の輸出伊万里を里帰りさせた中樽在住の蒲地孝典さん(56)が、その豊富な経験をもとに著された『幻の明治伊万里～悲劇の精磁会社』を出版されました。

明治8年に八代深川栄左衛門、辻勝蔵、手塚亀之助、深海墨之助・竹治兄弟らが設立した香蘭社から4年後に分離独立した精磁会社は、明治という日本の近代化を反映した名品を数多く世に送り出した会社でした。

しかし、副題に「悲劇の…」とあるように深海墨之助・竹治兄弟、川原忠次郎などの名工を擁し、時の政府のバックアップを得ながらも、10数年で廃業を余儀なくされた精磁会社がなぜ短命に終わったのか。その敗因について、江戸期に始まった有田焼の伝統と、明治維新後に導入された欧米の最新技術との折り合いの悪さにあったという、その過程を当館の資料も引用しながら詳細に分析されています。

名品を生み出すことと会社としての利益を出していくことの両立がいかにか困難なことであるか、現在の不況にも通じる明治初期の有田皿山の現状を知ること、これからの未来への鍵が隠されている本です。ぜひご一読ください。

季刊『皿山』

通巻70号(平成18年6月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185